

バサーズ 滋賀県大 BASSER'S の活動～水辺の生き物と地域振興

北野 大輔

滋賀県立大学近江楽座 滋賀県大 BASSER'S

生物資源管理学科

バサーズ 滋賀県大 BASSER'S とは

400 年以上の歴史を持つ古代湖である琵琶湖は、そこにしか見られない数多くの生き物が生息する世界的にも貴重な湖である。しかし、近年オオクチバスやブルーギルなどの外来生物の増殖によって、古くから成り立ってきた湖の生態系が崩れてきている。これが、いわゆる「外来種問題」である。

滋賀県大 BASSER'S は、学生としてこの外来種問題の解決のために、また、琵琶湖水系の豊かな環境を将来の世代に伝えるために活動している学生団体である。滋賀県立大学環境科学部の学生が主体となって活動している。

滋賀県大 BASSER'S では、外来生物に関する勉強会を主軸として、知識をメンバーで共有している。そこで得られた知識を駆除活動や広報活動に活かして、彦根市薩摩町にある神上沼を拠点に滋賀県内の各地で活動を展開している。

駆除活動

琵琶湖の内湖の1つである神上沼において特定外来生物であるオオクチバスおよびブルーギルを駆除する。内湖とは、湖のような大きな水域から水路などで接続された水域のことである。内湖は在来魚が産卵をし、その仔稚魚が生育するための重要な環境である。よって、外来魚による脅威を減らすことで、在来種にとって好適な環境作りを目指す。また、在来魚のモニタリング活動も行なう。さらに、捕獲した外来魚は大学に持ち帰り、研究室で解剖することで様々なデータを採取、蓄積している。

外来魚の駆除には、投網、刺し網を用いた（図1～2）。また、オオクチバスの浮遊稚魚が出現する時期には、タモ網を用いた稚魚掬いも実施した。

2013 年度の活動では、計 65 kg の外来魚の駆除に成功した。また、在来魚は、琵琶湖固有種であり絶滅危惧種であるホンモロコ、ニゴロブナ、ワタカをはじめとし、計 15 種が確認された。

我々の行なっている駆除活動は、普段から水辺に触れる機会のない人からは理解を得られない場合も



図 1. 投網による外来魚駆除



図 2. 刺し網による外来魚駆除

ある。実際に、「琵琶湖と繋がっている水域での駆除活動には意味があるのか」と問われることもあった。しかし、我々の活動の目的は、駆除を行なうことで外来魚を根絶することではない。外来魚の根絶は、ほぼ不可能だと言われている。しかし、外来魚を低密度に保つことは可能である。駆除を行なったことで、神上沼という環境が在来魚にとって少しでも良くなることが目的である。例えば、希少種であるホンモロコでは、抱卵個体が神上沼において確認されており、我々の駆除活動は、ホンモロコの繁殖の手助けとなっていると考えられる。

我々は今後も駆除活動を継続し、外来魚を低密度

に保つとともに、神上沼を在来魚にとって住みよい環境にすることを目指す。その結果、神上沼が在来魚の豊かな水域になることを期待している。

啓発活動

外来魚問題は、それを扱う当事者のみが知っていればよいものではなく、水辺周辺の地域住民にも広く知られていなければならない。しかし、現状では、外来魚問題が広く知られていないことが課題である。また、近年、いわゆる「川遊び」を楽しむ子供たちも少なくなり、水辺から関心が遠のいていった印象を受ける。そこで、滋賀県大BASSER'Sが環境コーディネーターとなり、外来魚問題について知ってもらうためのイベントを開催している。また、地域の人に水辺に触れてもらうための機会を提供し、地元の水辺に親しみを持ってもらうことを目標として活動している。

2013年度の活動では、「お魚探検隊 in 不飲川^{のます がわ}～夏の陣～」と、「犬上川川遊び」の2イベントを開催した。

・お魚探検隊 in 不飲川～夏の陣～

2013年6月30日（日）、彦根市普光寺町を流れる不飲川^{のます がわ}において、地域の子どもを対象にタモ網でのお魚採りイベントを開催した。参加者は19名であった。不飲川は、3面コンクリート張りの農業用水路であり、平均して水深は約7cmである。護岸から川底までかなり高いため、普段から子供が遊びに入ることは困難な水路である。

イベント当日の開会式では、川に入る際の注意点やタモ網の使い方などを説明した。また、自作の「お魚図鑑」を配布し、フィールドで活動しながら魚の名前を調べられるようにした。参加者が魚採りをしている間、メンバーも一緒に川に入り参加者の安全確認を行なった。安全監視をしながら、参加者



図3 フィールドでの活動風景



図4 お魚観察会

に採れた生き物の説明をしたり、質問に答えたりした（図3）。

活動の最後には「お魚観察会」を催し、採れた生き物を参加者によく観察してもらった。その後、それぞれの生き物について説明を行なった（図4）。

このイベントを通して、身近な自然の中で生き物と触れ合うことを楽しんでもらうことができた。活動では計12種の生き物が確認された。その中にはオオクチバスの稚魚をはじめとした外来種も確認され、参加者からは「こんなに浅いところにブラックバスがいたのがびっくりした」という意見が出た。このイベントは2012年10月にも開催しており、前回も参加した子供からは「前の時にはこのお魚は見つからなかった」などの意見が出た。季節によって生息する生き物が異なるという自然の変化を、子どもたち自身で発見できた。一方で初参加の人からは「浅いのになくさんお魚がいたのが意外だった」、「お魚を採るのが面白かった」などの意見があった。自分たちの住んでいる場所のすぐ近くの自然について、その自然と触れ合って遊ぶことについて知ってもらうことができた。

・犬上川川遊び

2013年7月21日（日）、滋賀県立大学北側を流れる犬上川において、川遊びを開催した。お魚探検隊とは異なり、このイベントは、きしわだ自然資料館^[1]の募集のもと開催されたものである。従って、参加者は大阪府の小学生とその保護者、博物館学芸員の計22名であった。

[1]: 大阪府岸和田市にある博物館。岸和田市の自然を環境別に紹介した資料が展示されており、地域の学校教育と連携した活動を行なっている。

イベント当日は、お魚探検隊と同様のタモ網によ



図 5. タモ網での生物採集



図 6. 投網体験

るお魚採りの他に、参加者による投網体験「なりきり琵琶湖漁師」も開催した。

お魚採りでは、魚類や甲殻類を含め、約 10 種の生き物が捕獲された（図 5）。その中には、参加者の地元の水辺では希少とされる生き物や、琵琶湖固有種である生き物も確認された。捕獲された生き物はプラケースに種類別に入れ、それぞれの生き物の生態や豆知識を BASSER' S メンバーが解説した。

投網体験では、初めはなかなか上手く投網が広がらなかった。しかし、数人の参加者は練習を重ねるごとに上達してゆき、最後にはアユを捕獲することができた（図 6）。

タモ網での生物採集以外にも、投網体験をすることによって、滋賀県でしか楽しめない活動をしてもらった。参加者の地元とは異なる水域での活動によって、地域ごとの河川の様子の違い、そこに生息する生物の違いを学んでもらえた。その地域に特有の生態系に気づき、固有種や希少種が生息していることの大切さを実感してもらえた。

今年度の啓発活動では 2 回のお魚採り活動を開催した。それぞれ、“季節による生き物の変化”、“地域による生き物の変化”をテーマとした。これらの変化は実際にフィールドに出て活動しないとわからないことである。我々の開催するイベントが、地域の人々が水辺に触れるきっかけとなったことをとても嬉しく思う。今後も、このような“水辺で楽しむ、水辺に親しむ”イベントを継続して開催していきたい。

おわりに

今年度の活動では、駆除活動以外に、啓発活動にも重点を置いた。上記の自主開催イベント以外にも、地域での開催行事や環境教育イベントに積極的に参加した。このことで、我々の活動を地域に広く知ってもらうことができ、地域との距離を縮めることができた（図 7）。また、これらの活動は、企業や NPO、行政などの外部団体の協力があったためにできたことである。外部とのつながりを大切に、多くの知識と経験を得て、来年度はさらに高いレベルでの活動を目指していきたい。



図 7. お魚探検隊での集合写真